

平塚柔道物語 4 7

厳愛の指導（1）

平塚柔道協会 会長 奥山晴治

教師の真田州二郎（協会理事・浜岳中学校柔道部活顧問）は、生徒に対して体当たりで指導にあたっている。

平成23年のことである。柔道部員の一人である松澤ヒデキ君の母親より、こんな話を聞いた。

金井先生（協会理事・中学生指導者）より連絡が入り、顧問の真田先生の雷が息子ヒデキに直撃したというのです。金井先生の説明によると乱取り稽古8本のうち、ヒデキはたった1本しか練習ができていなかった。それを見ていた真田先生は、ヒデキにはやる気がないと判断し、『練習をやりたくないなら出て行け』と一喝。ついに一番恐れていたことが起こってしまいました。外に出されたヒデキは、やがていなくなってしまったというのです。間もなく、ヒデキから電話。『俺、今日真田先生に怒られて帰って言われて、今総合体育館のそばにいる』蚊の鳴くような声のヒデキ。迎えに行くとヒデキは号泣していました。『真田先生は怖すぎて、学校へ戻るのは無理。柔道もやめたい』とヒデキは泣きながら訴えるのでした、しかし私は『とにかく自分で反省するところがあるのなら、ちゃんと学校に戻って真田先生に謝って欲しい』という金井先生の考えに納得しておりましたので、『真田先生に謝ってから柔道をやめなさい』と伝え、皆がまだ稽古している学校の柔道場へ送り届けました。実際、どんな風に我が子が叱られるのか気になって、私はこっそり後をついて行き、階段の陰に隠れるように立ちました。すると『今頃、何しに戻ってきた。さっさと帰れ!!』『帰れと言われてさっさと帰る奴なんかには用はねえんだ。お前は今日という日を捨てながら生きて行け!!』真田先生は想像以上の怖さでした。陰で聞いている私ですら思わず身がすくみ、涙が浮かんでくるほど!!ヒデキは一体どんな思いでいるんだろう。私はもう柔

道部をやめてもいい。皆が帰ったら、その旨を伝えようと思いました。ところが部活も終わり、皆が帰ってしまうと、真田先生は諭すような口調でヒデキに語りかけます。『なあヒデキ、お前、苦しいことは好きか?』『いいえ』『そうだよな、誰だってそうだ。でもな、強くなるためには好きじゃなくてもやらなきゃいけないこともある。そのことに自分が気づかないといけないんだ。自分に自信がない。自分のことが好きになれない。そうやって下を向いている人間が、どうしてそうなるのかわかるか?自分でやるべきことがわかっているのに、それをやっていないからだぞ。いやなことから逃げる。叱られたら、ふて腐れて帰る。お前、それでどんな大人になっていくと思う?朝起きたら、さあやるぞ!!と声を出して言うてみる。その日一日の行動は朝で決まるんだ!!』真田先生は約1時間、ヒデキたった一人のために、そうやって話を続けて下さいました。本当は親が子供に教えるべきことを時間かけて丁寧に、そして真剣に語りかけて下さる先生に対し、私は心から感謝したいと思い始めました。やがて『お前がサボって歩いている間に、みんなトレーニングして強くなったんだぞ。お前はどいうすべきなんだ』すると、ヒデキは、やっと心に火が付いたのか、トレーニングすることになったのです。ヒデキが準備している間に、真田先生が柔道場から急に出てこられ、私とバツタリ目があってしまいました。

—続く—



松澤ヒデキ君と
真田州二郎教師